

『医療音楽』にみるリチャード・ブラウンの 音楽療法思想

光平 有希

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

太古から現代に至るまで、人間は心身の治療や健康促進、維持する手段として音楽を用いてきた。私はそうした音楽療法の奥深い歴史の中で生み出された大いなる遺産を紐解くことが、現代の音楽療法理解にも繋がると考えており、その1例として、本論文ではリチャード・ブラウンの『医療音楽』（1729）を取り上げた。というのも、薬剤師であるブラウンは、これまでは主として哲学者や聖職者が取り上げてきた音楽療法について、初めて医療の立場から『医療音楽』という1冊を割いて、音楽の持つ治療的作用について言及しており、このことは、音楽療法の歴史を考える上で先駆的なものであると考えられるからである。

しかし、同書についての先行研究に関しては、『医療音楽』全体に焦点を当てた著作や本格的な論文は未だ見当たらない現状にある。そこで本論文は『医療音楽』について、ブラウンによって匿名でその2年前に書かれた『歌唱・音楽・舞踊機械論』も参考にしながら、1. 書誌学的考察、2. ブラウンの人物像、3. 『医療音楽』の内容、4. 『医療音楽』に見られる機械論的身体観、5. 『医療音楽』で重視された治療原理、と稿をすすめながら、ブラウンの音楽療法を解明することを研究目的とし、それと共に音楽療法の歴史における『医療音楽』の位置づけも試みた。

その結果、ブラウンの音楽療法には、ピトケアン学派の影響が顕著に見られ、その中で治療原理として「アニマル・スピリッツ」と「非自然的物事」という2つの概念を重視していたことが明らかとなった。『医療音楽』は理論書であり、実践書ではないものの、現代の音楽療法と同様に、「歌唱」、「音楽」、「舞踊」を通じてもたらされる生理的、心理的、社会的な効果を応用して、心身の健康の回復、向上を図ることを目的として書かれている。その点で、『医療音楽』はやはり、音楽療法史上、現代音楽療法の萌芽とも言うべく、重要な著作であると考えられる。

キーワード：リチャード・ブラウン、『医療音楽』、『歌唱・音楽・舞踊機械論』、アニマル・スピリッツ、非自然的物事、音楽療法

序論

1. 書誌学的考察

2. ブラウンの人物像

2.1 ブラウンの伝記に関する先行研究

2.2 ブラウンの伝記の再検証

2.3 ブラウンの職業環境

2.4 ブラウンが活躍した時代の音楽

3. 『医療音楽』の内容

3.1 第1章「歌唱について」

3.2 第2章「音楽について」

3.3 第3章「舞踊について」

3.4 第4章「憂うつ症と塞ぎ込み、すなわち ヒポコンドリーとヒステリーの状態について」

4. 『医療音楽』に見られる機械論的身体観

4.1 『医療音楽』に列挙される人物

4.2 典拠の同定

5. 『医療音楽』で重視された治療原理

5.1 『医療音楽』における「アニマル・スピ リッツ」の重視

5.2 『医療音楽』における「非自然的物事」 の重視

結論

序論

人間が治療や健康促進、維持する手段として音楽を用いてきたことの歴史は古く、古代まで遡ることができる。各時代を経て発展してきたそれらの歴史を辿り、思想を解明することは、現代音楽療法の思想形成の過程を辿る意味でも大きな意義を孕んでいるが、その歴史研究は、国内外でさかんになされていない。そこで本論では、音楽を医療に用いることに関して1冊を割いて初めて書かれたリチャード・ブラウン（18世紀頃）の『医療音楽』¹⁾を取り上げ、ここに見られる医学思想を検討し、音楽療法の歴史における『医療音楽』の位置づけを図る。ブラウンが『医療音楽』を著した18世紀は古代ギリシア思想から出発し、復興主義的な独自の文化を形成しつつ医療理論を体系化した時代であり、その中で彼は音楽療法を体系的に捉えようとした。それまでの近世では主に哲学者や聖職者が音楽療法に言及していた中で、薬剤師であったブラウンは医療的立場から初めて1冊を割いて『医療音楽』を執筆し、本著作は音楽療法の歴史上、先駆的なものと考えられる。

しかし『医療音楽』に関する先行研究としては、いずれもその内容について詳細に紹介がなされていない。わが国では、貫行子や篠田知璋が『医

療音楽』に書かれている歌唱の効果に触れているが²⁾、これらが依拠しているのはジュリエット・アルヴァンの『音楽療法』であり、アルヴァンはこの著作の中で、『医療音楽』に見られるいくつかの具体例を解説しているのみである³⁾。海外ではアリシア・クレア・ギボンとジョージ・ヘラーが、ブラウンに影響を与えたのは主としてオクスフォード大学やライデン大学に関連のある機械論者の思想であり、『医療音楽』で重視されている「アニマル・スピリッツ」に関しては、デカルト主義的生理学の影響が見られると述べるほか⁴⁾、ペネロペ・ゴウクが『医療音楽』は事実上、音楽療法の分野に専念した最初の英語の本であると指摘している⁵⁾。またチャールズ・ヒューズも、ブラウンの述べた音楽聴取の効果についてわずかに記述しているが⁶⁾、『医療音楽』全体に焦点を当てた著作や本格的な論文は未だ見当たらない現状にある⁷⁾。

結論から述べると、ブラウンの医学思想にはピトケアン学派の影響が色濃く見られるほか、『医療音楽』は音楽の持つ生理的、心理的、社会的な効果を応用して、心身の健康の回復、向上を図ることを目的として書かれているという点で、現代音楽療法の萌芽とも言うべく重要な著作である。本論では以下これらの様相を、ブラ

ウンにより匿名で『医療音楽』の2年前に書かれた『歌唱・音楽・舞踊機械論』⁸⁾も参考にしながら、1. 書誌学的考察、2. ブラウンの人物像、3. 『医療音楽』の内容、4. 『医療音楽』に見られる機械論的身体観、5. 『医療音楽』で重視された治療原理といった順で考察し、明らかにしていく。

1. 書誌学的考察

『歌唱・音楽・舞踊機械論』及び『医療音楽』の書誌は以下の通りである。

①『歌唱・音楽・舞踊機械論』の書誌

A MECHANICAL / ESSAY / ON / *Singing, Musick and Dancing.* / Containing Their / USES and ABUSES; / And Demonstrating, / By Clear and Evident REASONS, / the ALTERATIONS they produce / in a Human Body. / LONDON: / Printed for J. PEMBERTON, at the *Golden-Buck*, against St. *Dunstan's* Church in *Fleet-street*. M.DCC. XXVII./

A-G⁴; 4, (1), 46, 2 pp. 8vo.

[A2r⁰] title-page [A2v⁰] blank [A3r⁰-A4v⁰] introduction [B1r⁰-G3v⁰] text [G4r⁰-G4v⁰] Books Lately Printed for J. Pemberton, …

題目和訳は以下の通り。

『歌唱・音楽・舞踊機械論—それらの使用と乱用を含み、明瞭で明白な理由により、それらが人体で生み出す変化についての実証。—』

内容目次は以下の通り。

序論 (4ページ)

第1章：歌唱について (20ページ)

第2章：音楽について (18ページ)

第3章：舞踊について (12ページ)

上記の書誌から『歌唱・音楽・舞踊機械論』は、人体への「歌唱」と「音楽」、「舞踊」の効果に関して匿名で書かれ、1727年にロンドンのペンバートンによって出版されたことが分かる。なお、この『歌唱・音楽・舞踊機械論』がブラウンの著作であることはあまり知られておらず、

先行研究でもほとんど取り上げられていない。

②『医療音楽』の書誌

Medicina musica: / OR, A / Mechanical Essay / ON THE / EFFECTS / OF / Singing, Musick, and Dancing, / ON / HUMAN BODIES. / Revis'd and Corrected. / To which is annex'd, / A NEW ESSAY on the / NATURE and CURE of the Spleen and Vapours. / By RICHARD BROWNE, APOTHECARY in Oakham, in the / County of Rutland. / LONDON, / Printed for JOHN COOKE, Bookseller in Uppingham., and Sold by J. and J. KNAPTON, / at the Crown in St. Paul's Churchyard. / MDCCXXIX. / A-I⁸, xv, (1), 125, (1) pp. 8 vo.

[A1r⁰] title-page [A1v⁰] blank [A2r⁰-A4v⁰] to the Right Baptist Earl of Gainsborough, [A5r⁰-A8r⁰] The Preface [A8v⁰] blank [B1r⁰-I7r⁰] text [I7v⁰-I8r⁰] blank

題目和訳は以下の通り。

『医療音楽—すなわち、人体への歌唱、音楽、舞踊の効果に関する機械論。改訂版。憂うつ症と塞ぎ込みの本質と治療に関する新論文付。—』

内容目次は以下の通り。

献辞 (6ページ)

序文 (7ページ)

第1章：歌唱について (31ページ)

第2章：音楽について (21ページ)

第3章：舞踊について (19ページ)

第4章：憂うつ症と塞ぎ込み、すなわちヒポコンドリーとヒステリーの状態について (57ページ)

上記の書誌から『医療音楽』の著者はイギリス、オーカムの薬剤師リチャード・ブラウンで、1729年にアッピンガムのジョン・クックにより出版、クナプトンによりロンドンで販売されたことが分かる。また『歌唱・音楽・舞踊機械論』と比較すると、『医療音楽』は同構成の上、「憂

うつ症」と「塞ぎ込み」の本質と治療に関する論考の付加も認められる。

2. ブラウンの人物像

2.1 ブラウンの伝記に関する先行研究

ブラウンは生涯について謎の多い人物であり、また先行研究も少ない。しかしその中でウィリアム・ムック、ハロルド・クック、リチャード・ハンターは、比較的詳しくブラウンの伝記について言及しているため、ここでは彼らの説をそれぞれ概観してみたい。

まず、伝記学者ムックは、1878年に作成された『ロンドン王立医学会名簿』⁹⁾の中で、ブラウンは1625年に生まれ、オクスフォードのクイーンズカレッジで教育を受けた後、1675年、50歳の時にライデン大学で医者の学位を取得し、1676年にロンドン王立医学会の免許状所有者として認められたと記している。また、著作については、『医療音楽』を含め5冊あるとし、『医療音楽』の出版年を1674年とする。

次いで、医学史研究者クックは『オクスフォード人名事典』¹⁰⁾において、ブラウンは1647年から1648年に生まれ、1693年から1694年に生涯を閉じたとするなどムック説と多少の差異はあるものの、ムックと同様、ブラウンを医者としている。また、1729年に出版された『医療音楽』の初版年を1674年としている点も同一である。

しかし、医学史研究者ハンターは『オクスフォード・ジャーナル』¹¹⁾の中で、『医療音楽』を書いたブラウンは1710年に生まれたオーカムの薬剤師であると記している。さらに彼は、1729年に出版された『医療音楽』の初版本として1727年に『歌唱・音楽・舞踊機械論』が出版されており、『医療音楽』の初版年をムックが1674年と間違えたことにより、この誤った情報が長きに亘って流布したことを指摘している。ただしこの伝記についてはムック説が主流であり、ハンター説はあまり採用されていない。

このようにブラウンの伝記に関しては諸説が

あるが、ブラウンが活躍した時期及び職業を明らかにすることは、ブラウンの医学思想を探るために重要な課題である。そのため、次節ではブラウンの伝記を再検証してみたい。

2.2 ブラウンの伝記の再検証

ブラウンは『医療音楽』の序文で、『医療音楽』は第2版であり、自身はこれより数年前の徒弟時代に匿名で初版本を出版したと記している。さらに『医療音楽』では、初版本にはなかった「憂うつ症」や「塞ぎ込み」についての論考が付加されているとも述べているが¹²⁾、この初版本とは、前述した書誌からも分かる通り、『歌唱・音楽・舞踊機械論』のことを指していると考えられる。また、『医療音楽』の献呈者や、本著作で引用される医者の名前を概観すると、『医療音楽』の初版年が、ムック説、あるいはクック説の示す1674年まで遡れないということは明白である¹³⁾。

したがって本論では、これまで大きな影響力を誇示してきたムック説ではなく、ハンター説に着目し、ブラウンの生涯について再考してみたい。ハンターはブラウンを1710年に生まれたオーカムの薬剤師としているが、ブラウンが1710年に生まれたという根拠については言及していない。しかし「ラトランド地方史・登記研究会」に、オーカムの各教会の記録簿を調査依頼した結果、オーカムのオールセイントス教会の記録簿にはリチャード・ブラウンという人物が1710年7月5日に生まれたという記録があることが分かり、これはハンター説を裏付けるものであると言えよう¹⁴⁾。また、イギリスでは1617年にロンドン薬剤師会会員へ薬局所有の独占権を授与し、薬を調合して投与することを許可しており、薬剤師となるためには7年間の徒弟期間と薬剤師資格を有することが規定されていた¹⁵⁾。なお、徒弟期間の開始年齢は個人によって異なるが、当時は通常15歳までに始めることが多かった。これらを総合的に考えると、ブラウンは1710年に生まれ、10代の初め頃より7年の

徒弟期間を経て薬剤師になったと仮定することができよう。

これを受け、18世紀の徒弟制度に関する情報が網羅されている『18世紀の医療に従事する人々』の中でブラウンの名前を検索してみると、そこには1721年4月13日に、ラトランドのオーカムにいる外科医のウィリアム・ポートルの下で、7年の徒弟生活を始めた「リチャード・ブラウン」の記録があった¹⁶⁾。上記のブラウンは1728年に徒弟期間を終了したことになるが、『医療音楽』の序文でブラウンは、自身は初版を出した時、つまり1727年にはまだ徒弟期間中であったと記述しているため、『18世紀の医療に従事する人々』に書かれているリチャード・ブラウンは、『医療音楽』を執筆したブラウンと同一人物の可能性はある。けれども残念ながら、同時代にリチャード・ブラウンという名前の人物は複数存在し、正確に同定することは困難である。しかし上記の考察により、少なくとも徒弟期間中の1727年に『歌唱・音楽・舞踊機械論』を執筆し、1729年に『医療音楽』を書いたのは、医者ではなく薬剤師のリチャード・ブラウンと想定することができる。この薬剤師としてのブラウン像を念頭に考察していくことは、彼の思想的背景を解明するのに重要である。では、薬剤師としてのブラウンは如何なる職業的状況下で『医療音楽』を執筆したのであろうか、次節で概観してみたい。

2.3 ブラウンの職業環境

西洋の医療制度は、中世末期から近世初頭にかけて、内科医、外科医、薬剤師の3階層分業制として形成されていた。内科医は大学で医学全般を学んだ知識人であり、それ故、外科の知識も有していたが、制度上の建前としてはそれを外科医に委ね、自らは内科業をその職務とした。外科医はむろん外科を職務としたが、彼らは各都市の外科医ギルドに結集した職人で、通常理髪師を兼ねていた。薬剤師は薬剤師兼薬種商人

で、彼らも各都市の薬剤師ギルドに所属した。また、薬剤師は医業最上層の内科医の監督の下、彼らの処方箋を受けて薬品を調合する業務をする一方、街中に店舗を構えての薬の販売も行った¹⁷⁾。

しかしイギリスにおいて、前述した3者間の内科、外科、薬剤の分業関係は、16世紀から19世紀初頭に至る3世紀の間にほぼ崩壊してしまった¹⁸⁾。この変化を引き起こした要因としては、大きく2つのことが指摘できる。1つ目は、ギルドが形骸化してその規制力が完全に機能しなくなってしまい、外科医と薬剤師に自由な営業空間が生まれたからである。2つ目は、15世紀以来、外科医が内科と産科にも手を広げて、いわゆる一般開業医となっていく一方、元々の薬剤師までもが薬種商人から医者への上昇願望を抱いて、その薬剤の知識と技術を利用しつつ内科医業に進出するに至ったからである。そして彼らは1703年に法的にも薬剤業と内科医業との兼業を認められ、18世紀の末までには、薬剤師の機能を保持したまま、その活動の主たる領域を医業に移してしまった。つまり、彼らは大抵の場合、薬剤師と並んで外科医の資格も得ることによって職業の幅を広げていったのである¹⁹⁾。このように独立した立場が確立しつつあった時代の中で、17世紀後半頃から薬剤師は、これまで自分たちを傘下として扱ってきた内科医を中心とした医者たちと激しく対立を始めた。ブラウンが医者ではなかったにも拘わらず、『医療音楽』という医学書を執筆した背景には、このような職業環境があると考えられる。

2.4 ブラウンが活躍した時代の音楽

ブラウンが活躍した18世紀前半から中頃までは、音楽史的区分上ではバロック時代の後期に位置する²⁰⁾。バロック時代以前の音楽は声楽が主流であったが、この時代に入ると楽器の性能が向上したこともあり、器楽も重要な位置を占めるようになった。ブラウンも『歌唱・音楽・

舞踊機械論』及び『医療音楽』の第2章において、トランペット、ホルン、オーボエ、フルート、フラジオレット、ヴァイオリン、オルガンなどの管楽器、弦楽器、鍵盤楽器を具体的に取り上げているが、これらの楽器はいずれも当時の器楽作品の中で用いられており、比較的容易に音色を聴くことができたと考えられる。

この時代の音楽は後援の王侯貴族や教会の意向に沿って作曲されることも多々あったため、大規模で豪華絢爛、感情の起伏も激しく劇的な作風になっている点、そして曲全体を低音声部が一貫して流れているという、通奏低音の響きを持つ曲が多い点が特徴的である。その一方で、市民階級にもクラシック音楽の門戸が大きく開かれ、特に貿易で経済的に潤ったイギリスでは、弦楽器や鍵盤楽器の普及により、一般市民の中でも日常的に組曲やソナタ、協奏曲が演奏されるようになった。また、ロンドンではゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（1685-1759）などの英語によるオラトリオやオペラが流行した。

さらに、この時代は楽曲の形式が確立されることによって舞踊形式の種類も増え、社交の場では舞踊が欠かせないものとなった。これらのことから、音楽は当時の市民生活や社会に密接なものであった様子が垣間見られるが、この音楽を楽しむだけでなく、治療にも用いようという動きがイギリスには顕著に見られた。その代表的な人物としてはブラウンのほか、ロバート・バートン（1577-1640）²¹⁾ やリチャード・ブロックスビー（1722-1797）²²⁾ などが挙げられるが、彼らは音楽を精神疾患の治療に用いることを勧め、音楽の持つ治療的な効果について言及した。では、このような時代背景の中で書かれた『医療音楽』とは如何なる内容であるのだろうか。

3. 『医療音楽』の内容

3.1 第1章「歌唱について」

ブラウンは『医療音楽』全体を通してメランコリーやヒステリーなどの精神疾患を取り上げ

て言及している。第1章の冒頭では、「歌唱」は聴覚を刺激して快楽や歓喜を促進し、精神を鼓舞する故に精神疾患の治療に有効であるほか、「歌唱」は精神面のみならず、身体面にも影響を与えるとして以下の命題の下で論を展開する²³⁾。

命題1：魂と「アニマル・スピリッツ」には共鳴がある。

命題2：心臓の動きと血液循環は「アニマル・スピリッツ」の流入に依存し、「アニマル・スピリッツ」の流入が速く強くなると脈拍も速く強くなる。反対もしかり。

命題3：筋肉繊維への「アニマル・スピリッツ」の流入により、主として胃の摩擦で消化は行われる。横隔膜や腹筋の相互の圧力もまた、同じ作用において促進される。

命題4：肺を通過する血液は空気圧によって細分化される。

命題5：気圧計に水銀柱が落ちる時、血液循環は遅くなる。反対もしかり。

命題6：歌唱での、肺における空気圧は、通常
の呼気よりも大きくなる。

これらの命題でブラウンは、精神疾患の治療において「アニマル・スピリッツ」の流動が最も重視されるべきであるという立場をとっている。本論で述べる「アニマル・スピリッツ」とは、Animal Spirits及びその基となったラテン語のspiritus animalesという西洋医学史における思想的用語の音訳である。従来の訳語としては、西洋近世哲学分野において、「動物精気」という直訳が定着しているが²⁴⁾、これはルネ・デカルト（1596-1650）がラテン語からフランス語へ直訳したEsprits animauxに由来する訳語であると思われる。しかしフレデリック・クレインスは、「動物精気」という訳語では、spiritus animalesという用語が当時持っていた意味を正確に表わすこ

とができないとしている。なぜならばanimalesはanima（靈魂）を語源とする言葉であり、spiritusは非物質的なものではなく、空気と深い関係のある物質的なものとして理解すべきだからである²⁵⁾。このようなanimalesとspiritusという各語の持つ語源的な背景を考慮して、本論では従来の「動物精気」では正確な意味を表わさないと考え、「アニマル・スピリッツ」と音訳することとした。同様に、身体生命機能を営むVital Spiritsは「ヴァイタル・スピリッツ」、身体を養う機能を営むNatural Spiritsは「ナチュラル・スピリッツ」と音訳する。

さて、これらのスピリッツとはその概念の起源については定かではないものの、古代ギリシアでは体内を循環して全ての活動の基盤となっていると考えられていたものである。ガレノス(2世紀)によると、「ナチュラル・スピリッツ」は肝臓で生じて血液に宿り、消化機能を営むという。そして肝臓では「ナチュラル・スピリッツ」と栄養物質で充たされた静脈血が作られ、これらは静脈を通じて心臓へと行き、心臓では左心室にある熱と肺静脈から来る空気の中で、今度は生命機能を営む「ヴァイタル・スピリッツ」と動脈血が作られる。この「ヴァイタル・スピリッツ」や動脈血は動脈経由で全身に分配されるが、脳へ達すると、ここでは動脈を通して送られてきた「ヴァイタル・スピリッツ」から「アニマル・スピリッツ」が作られ、それらは神経を通して全身に分配される。なお、この「アニマル・スピリッツ」は脳及び神経系機能を司るとい²⁶⁾。ガレノスの生理説は1628年に提唱されたウィリアム・ハーヴェー(1578-1657)の血液循環論によって血液循環が心臓の筋肉運動で説明できるようになったため、「ヴァイタル・スピリッツ」の説が覆されたほか、同じく17世紀初頭にはヤン・ファン・ヘルモント(1579-1644)が新陳代謝を各消化器官に基づいて7段階に分類し、胃の中における酸性胃液や十二指腸におけるアルカリ性の胆汁を発見したことで新陳代謝の機能を

説明できるようになり、「ナチュラル・スピリッツ」の概念が不要となった²⁷⁾。しかしそうした中、依然として神経の働きはまだ解明されていなかったため、「アニマル・スピリッツ」の概念は18世紀においても医学思想の中でなお利用され、ブラウンも精神疾患の治療においては「アニマル・スピリッツ」の流動を促進することが最も重要であるとしている。

ブラウンによると、「歌唱」は快樂や歡喜を包含している故に精神に働きかけ、その結果、精神と共鳴があり、精神と身体媒体でもある「アニマル・スピリッツ」の分泌を促進するという²⁸⁾。さらに、「アニマル・スピリッツ」と血液循環にも相互作用があり、「アニマル・スピリッツ」の流入が強くなればなるほど脈拍も強く速くなる²⁹⁾。また、ブラウンは「歌唱」が及ぼすそのほかの影響についても次のように述べる。まず、「歌唱」は胃の筋肉繊維の状態と弾力性を回復させる効果を有しており、それによって消化不良が解消され、さらには「歌唱」による横隔膜や腹筋の頻繁な動きが食物を血液へと転換するのに役立つ³⁰⁾。一方、肺は「歌唱」によって吸気が大きくなることにより、肺で生成される肺静脈の流動が活発化し、血液循環が促進されるとして³¹⁾、彼は、「歌唱」の持つ運動的効能の側面についても触れている。ブラウンは、精神は身体に影響を与え、また身体も精神に影響を与えると考えており³²⁾、その双方の健康に重きを置いていたため、精神と身体媒体となる「アニマル・スピリッツ」が精神疾患の治療には不可欠であった。そして「歌唱」の快樂や歡喜に目を向けつつ、身体面への「歌唱」の直接的な効能についても言及し、その双方が整った時に健康が育まれると考えていた。ここには心身の健康を日常的に保つため、つまり養生法的に「歌唱」を用いるというブラウンの思想が見受けられる。このようにブラウンは精神と身体を分けて考えているほか、当時の機械論者たちが支持した血液循環も重視しており、ここから『医療音楽』

の副題にも書いていた通り、当時の機械論的身体観を念頭に考察していた様子が窺える。さらに彼は「歌唱」の悪影響についても触れるほか³³⁾、「歌唱」のみで病気は治らず、病気は本来、適切な薬に頼ることが必要であり、「歌唱」はその治療を補完するために用いるべきであるという姿勢も表している³⁴⁾。ここには、薬剤師としてのブラウンの思想が垣間見られるのではないであろうか。

3.2 第2章「音楽について」

第2章でブラウンは、「音楽」がもたらす効能について考察しているが、ここでブラウンが想定している「音楽」とは、内容を概観する限り、音楽全般を指すのではなく器楽に限定している。その「音楽」についてブラウンはまず、外耳、内耳ともに音の伝わり方は空気振動の度合いに左右され、その空気振動の大きさによって聴神経には様々な影響がもたらされるほか、この聴神経へと働く空気の心地よい振動から直接、精神的な心地よさも生じると述べている³⁵⁾。その一方で彼は「音楽」を聴取することで精神が高揚、鎮静することからも分かるように、「音楽」には直接的に精神に作用するという効能が認められ、これら双方の理由から「音楽」は精神疾患の治療に有用であるとする³⁶⁾。そしてさらに、この「音楽」によってもたらされた心地よさが、歌唱の時と同じく「アニマル・スピリッツ」を促進すると共に、空気振動に影響を受けた聴神経も「アニマル・スピリッツ」に働きかけるとして「音楽」の内容、特に奏法や速度に関する具体例を挙げながら説明する³⁷⁾。

例えば、ヴァイオリンのストリングが素早く、大胆に打ち鳴らされるような奏法やアレグロの器楽曲の場合、空気振動は速く、短く、大胆になる。それによって聴神経は活発に煽動され、共鳴した「アニマル・スピリッツ」も活性化される。さらに、この「アニマル・スピリッツ」が身体全体にこの共鳴と類似した感覚を伝達す

ることにより、精神には活発で強い喜びが与えられるとブラウンは述べる³⁸⁾。これらのことからブラウンは、アレグロの曲は暗く悲観的な思想を抱いてしまいがちな、「憂うつ症」や「塞ぎ込み」の治療に役立つという³⁹⁾。一方、ヴァイオリンの柔らかく遅いストロークが用いられるような奏法やアダージョの曲は、穏やかな空気振動が聴神経に働きかけ、それにより「アニマル・スピリッツ」は減退、あるいは逆流し、その結果、精神は非常に鎮静化し恍惚状態が引き起こされるといふ⁴⁰⁾。そして、怒りや激憤に満ちている時は激しく不規則な「アニマル・スピリッツ」の動きが付随しているため、それを防ぐには、まず柔らかなアダージョを用いるべきであるとブラウンは付け加える⁴¹⁾。ブラウンの考えていた精神と「音楽」の関係は、元々の精神状態とは逆の性質を有する「音楽」を用いるという、いわば「逆療法的な概念」に似ている⁴²⁾。また、ブラウンは前述したようなアダージョとアレグロという反対の性質を有する楽曲を日常的に聴取することにより、「音楽」の心地よい対比で健康を維持することができると考えており⁴³⁾、ここでも「歌唱」の効能と同様に、養生法的な概念が窺える。

このように、ブラウンは『医療音楽』においては、「アニマル・スピリッツ」に焦点を当てて器楽を患者が受動的に聴取する、受動的音楽療法についてのみ言及している。しかし2年前に出版された『歌唱・音楽・舞踊機械論』では、器楽曲聴取時の効能と同時に患者自身が吹奏楽器を演奏するような、能動的音楽療法にも言及しており、その効能として血液循環の活性や、呼吸器系の発達促進にも着目している。これは『歌唱・音楽・舞踊機械論』と『医療音楽』との2年の間に、「音楽」に関してブラウンが「アニマル・スピリッツ」の存在をさらに強調し、適正なアニマル・スピリッツの流動が、受動的音楽療法によってのみ得られるという思想に移行しているという思想変更の様相を浮き彫りにしている。

3.3 第3章「舞踊について」

ブラウンは「舞踊」に関して大きく2つの効能を主張する。1つ目は、「舞踊」で筋肉運動が引き起こされることに伴い血管中の血液が希薄化して血液流動が促進され、この血液流動の促進に呼応し、「アニマル・スピリッツ」の流入も促進されて「憂うつ症」や「塞ぎ込み」の治療に繋がるということである。というのも「憂うつ症」や「塞ぎ込み」は、「アニマル・スピリッツ」の欠如が原因となり、粘液質の血液によって引き起こされる病気で、「舞踊」を行うことによって血液循環や「アニマル・スピリッツ」の流動促進がもたらされることで症状が改善されるからである⁴⁴⁾。2つ目は、「舞踊」によって腸が刺激されて動きが活発化し、横隔膜、腹筋、胃等の腹部が総体的に働くことで消化と乳糜生成が助けられ、血中の老廃物の新規供給も断ち切られるということである⁴⁵⁾。

なお、「舞踊」の適切な時間帯や時期に関して、「舞踊」は夕食までに済ませておくことが好ましいとするほか、多量の汗をかくことは避けなければならないため、夏より冬の方が「舞踊」に適しているとも述べている⁴⁶⁾。ここからはブラウンが日常的に「舞踊」を取り入れることを念頭に置いている様子が窺える。さらにブラウンは、過度な「舞踊」により「アニマル・スピリッツ」を消耗するという逆効果を懸念して⁴⁷⁾、「ほどほどに行う」ことを勧めており、これは古代医学より続く「中庸的な概念」に通じる思想ではないかと考えられる⁴⁸⁾。

「舞踊」でもブラウンは「アニマル・スピリッツ」の促進を重視しているが、「歌唱」や「音楽」のように精神に働きかけ、その結果得られる「アニマル・スピリッツ」の流動促進を強調しているのではない。ここでは、あくまでも筋肉や腹部へ、「舞踊」が直接働きかけることによって血液循環や「アニマル・スピリッツ」の流動を促進する効能に言及しており、「舞踊」の持つ運動的効能の側面を重視している点が特徴的である。

3.4 第4章「憂うつ症と塞ぎ込み、すなわちヒポコンドリーとヒステリーの状態について」

『医療音楽』で付加された第4章では、「憂うつ症」と「塞ぎ込み」について、原因・症状・治療・まとめに分けて体系的に考察がなされている。

まず「憂うつ症」と「塞ぎ込み」の原因についてブラウンは、これらは同一の病気であり⁴⁹⁾、「アニマル・スピリッツ」の異常によって固体が弛緩させられることが原因で引き起こされ、それは神経液が妨げられることとも関係があると述べる⁵⁰⁾。これらの病気は古代より取り上げられ、「憂うつ症」は脾臓に原因があって男性がかかり、ヒポコンデリーの症状を呈すと考えられていた。一方「塞ぎ込み」は、子宮に原因があって女性がかかり、ヒステリーの症状が引き起こされるとされてきた⁵¹⁾。しかし近世に入り精神医学が次第に発展するにしたがって、この「憂うつ症」と「塞ぎ込み」は同一の病気であると考えられ始めた。また、18世紀のイギリスでは English Malady (英国病) とまとめて、「憂うつ症」、「塞ぎ込み」、「ヒポコンデリー」、「ヒステリー」を神経の病気として同義語として論じることが増え、機械論者たちはこれらの病気を身体の欠陥によって引き起こされるものであると主張した。その思想的背景を受け、ブラウンは「憂うつ症」と「塞ぎ込み」の本質は、「アニマル・スピリッツ」の不完全な分泌によって引き起こされ、それは神経における栄養失調なのであると定義づける。またここでは「アニマル・スピリッツ」と並んで、これまでの章には出てこなかった固体と液体との関係や、神経液を重視するといったヘルマン・ブールハーヴェ (1668-1738) に代表される機械論的身体観をブラウンが取り込んでいる様子も窺える。「憂うつ症」と「塞ぎ込み」の症状としてブラウンは、腹部の痛み、腹部から咽喉へと液体が上昇する窒息感、心臓の痙攣、悪夢、失神と気絶、不眠などを挙げている。ブラウンはこれに関し、いずれも「アニマル・スピリッツ」との関係が問題となって、

症状が引き起こされると論じている⁵²⁾。また、それらの治療としては瀉血、嘔吐、下剤の使用、阿片の使用、ペルー樹の樹皮や鉄の使用について可否を考察する⁵³⁾。

そして最後にブラウンは、「非自然的物」という概念を重視する自身の思想について論じる⁵⁴⁾。この「非自然的物」とは、「食物」「鬱滞と排出」「空気」「運動」「目覚めと睡眠」「精神の動揺」といった健康が左右される6つの要素であり、これは病気の原因にもなる一方、適切に用いられるならば病気の治療にもなるとして、古代から伝承されてきた養生法的な概念である。ブラウンは、「歌唱」「音楽」「舞踊」を治療としてのみならず、健康維持のために日常的に用いることも各章で勧めており、ここに「非自然的物」の概念が絡んでくる。このようにブラウンは、古代から伝わる思想を重んじつつも当時の機械論的身体観を用いながら、「アニマル・スピリッツ」や血液循環を重視した思想を展開している。では、ブラウンが具体的にどのような機械論的身体観に従って考察をしていたのか、彼自身が列挙している人物の思想と典拠を同定することによって探ってみたい。

4. 『医療音楽』に見られる機械論的身体観

4.1 『医療音楽』に列挙される人物

『医療音楽』でブラウンは、トマス・シデナム(1624-1689)、リチャード・ロウワー(1631-1691)、マルチェロ・マルピーギ(1628-1694)、ロレンツォ・ベッリーニ(1643-1704)、アーチボルト・ピトケアン(1652-1713)、フィリップ・エケー(1661-1737)、ジョルジョ・バリーヴィ(1668-1707)、ヘルマン・ブルハーヴェ、リチャード・ミード(1673-1754)、ジョン・フレンド(1675-1728)といった10名の医者を取り上げ論じる。この10名中、養生法を重視したシデナム、心臓・血液循環の権威であったロウワーを除く8名が機械論者に相当し、ここからブラウンが機械論的身体観をいかに重視していたかが窺える。

しかし機械論的身体観といっても医者たちの思想的、社会的背景によって諸説ある。

例えば、イタリア人のバリーヴィ、ベッリーニ、マルピーギはデカルトに由来する機械論を重んじ、生理学的現象を物理学として理解する医学物理派の中心的人物であった。また、フランスで活躍したエケーの思想の基盤にはニュートン哲学が重視されていた。さらに、スコットランド出身で、エケーと同じくニュートン的な機械論を精神医学の中で積極的に推進したピトケアンや、オランダ出身で様々な医学理論を体系的に融合し、折衷派機械論者として知られるブルハーヴェは、ヨーロッパ全土に弟子を輩出した。そして、彼らに影響を受け、イギリスで活躍し、当地で機械論を根付かせたのがミードやフレンドであった。果たしてブラウンは、これらの機械論的身体観の中でも具体的にどのような思想を重視して論じていたのだろうか、次節では、ブラウンが列挙している医者たちの原文を参考にしながら、ブラウンの重視する機械論的身体観を検討する。

4.2 典拠の同定

まず、ギボンとヘラーによる先行研究では前述した通り、ブラウンに影響を与えたのは、主としてオックスフォード大学やライデン大学に関連のある機械論者の思想であり、『医療音楽』で重視されている「アニマル・スピリッツ」に関しては、デカルト主義的生理学の影響が見られると言及している⁵⁵⁾。ギボンとヘラーはブラウンの生涯について、ブラウンが17世紀中頃にオックスフォード大学及びライデン大学に所属していた医者であるという前提の下、ブラウンが学生時代に直接関わりを持ったであろう人物を中心として列挙し、典拠所在の可能性を模索している。しかしブラウンは本論第2章でも明らかにしたように、18世紀に生まれた薬剤師であると考えられ、オックスフォード大学及びライデン大学に所属していた医者ではない可能性が高い。

また、ブラウンはピトケアの『作品』という著作について引用しているが、ギボンとヘラーはブラウンが「ピトケアの『作品』」と記述しているものは、ピトケアの著作ではなく、ベリーニがピトケアに献呈した『いくつかの作品』⁵⁶⁾であろうと示唆している。しかし内容を確認した結果、これはピトケア自身が1714年に出版した『医学作品』⁵⁷⁾のことであり⁵⁸⁾、「ピトケアの『作品』」で間違いはない。さらにギボンとヘラーは、ブラウンが引用しているエケーとはフランスの解剖学者ジャン・ベケー（1622–1674）のことであるとしているが、18世紀前半には、フランスでフィリップ・エケーという機械論的身体観を重視した医者が実際に活躍しており、ブラウンが言及したのは、このエケーであると考えられる⁵⁹⁾。このようにギボンとヘラーによる先行研究には誤りが認められるため、以下、ブラウンが精神疾患の治療において重視した「アニマル・スピリッツ」や血液循環を論じる際に引用されている著作を中心として典拠の同定を試み、ブラウンの思想の源流を改めて紐解いてみたい。

まず、「アニマル・スピリッツ」に関してブラウンは、ピトケア⁶⁰⁾、ブールハーヴェ⁶¹⁾、ミード⁶²⁾、フレンド⁶³⁾の著作から引用して説明している。その中でブラウンが記述している、消化と「アニマル・スピリッツ」との関係について論じたピトケアからの引用⁶⁴⁾、阿片がもたらす繊維や「アニマル・スピリッツ」への影響に言及したミードからの引用⁶⁵⁾、鉄が血液の希薄化と「アニマル・スピリッツ」への転換に役立つと論じたフレンドからの引用に関しては⁶⁶⁾、典拠同定ができた。しかし、固体部分が「アニマル・スピリッツ」により育成及び回復させられると論じたブールハーヴェからの引用は⁶⁷⁾、典拠同定ができなかった。ブラウンは、これに関する具体的な書名を挙げてはいないが、当時、医療関係者に広く読まれた『箴言』⁶⁸⁾や『医学教程』⁶⁹⁾を見てみると、ブールハーヴェは主と

して血液循環を重視する思想を展開する一方で、一般的なスピリッツ思想も便宜上受け入れており、「アニマル・スピリッツ」が筋肉運動や神経に影響を及ぼすと述べている⁷⁰⁾。しかし、ブラウンが紹介したような固体部分が「アニマル・スピリッツ」により育成及び回復させられるという内容は見当たらない。これについては当時、西洋全域に大きな影響を与えていたブールハーヴェの名前を借用し、ここにブラウンの解釈を加えることによって、「アニマル・スピリッツ」を重視する自論の補完を狙った可能性もある。

その一方、前述した通りピトケアを始めとする3名の記述に関しては典拠の同定ができたわけであるが、このピトケアはスコットランド出身の医者で、オランダのライデンやイギリスのエジンバラで多くの学徒を輩出した。ピトケア学派は偶然性を排除し、確実性のある物理学や力学に裏打ちされたニュートン哲学を特に重んじた。17世紀のヨーロッパ学界において大きな影響を及ぼしたのはデカルト哲学であった一方、続く18世紀はニュートン哲学が大きな影響力を持つようになった。ピトケア学派は、そのニュートン哲学を用いて医学を数学的に理論化することによって、より科学的に身体を説明しようとした点に特徴が見出される。その一方で、目に見えず曖昧な存在の「アニマル・スピリッツ」を、彼らが支持していたということは注目に値する。ピトケアの代表的な学徒には、ウィリアム・クックバーン（1669–1739）、ジョージ・ヘップバーン（1670–1759）、ジョージ・チェイン（1671–1743）のほか、『医療音楽』の「アニマル・スピリッツ」に言及する部分で引用されている、ミードやフレンドも名を連ねる。この学派が重視したアイザック・ニュートン（1642–1727）は、スピリッツの存在を認めていた⁷¹⁾。それ故、ニュートン哲学に傾倒していたピトケア、ミード、フレンドの著作でも「アニマル・スピリッツ」は受け入れられ、随所で言及されている⁷²⁾。これはブラウンの「アニマル・

スピリッツ」の多用に合致しており、彼が『医療音楽』で「アニマル・スピリッツ」を重んじることに関しては、従来考えられてきたようなデカルト哲学からの影響ではなく、ブラウンの思想の直接的な拠り所が、ニュートン哲学に依拠するピトケアン学派であると推定できる。

次いで、血液循環についても概観してみたい。ブラウンは、血液の粘着によって引き起こされる熱について、その典拠としてベッリーニの名を挙げる⁷³⁾。ベッリーニは『熱について』という著作を残しており、この中でブラウンが紹介しているように熱と血液を関連付けて論じ⁷⁴⁾、この内容については、ピトケアンも『医学作品』の中で紹介している⁷⁵⁾。

また、ブラウンはロウワーの著作を引用し、血液循環に関する当時有名であった犬の実験例を紹介している⁷⁶⁾。ブラウンはロウワーの著作として『心臓の動きについて』を挙げているが、実際、同内容が含まれているのは『心臓に関する論考』⁷⁷⁾であり、ブラウンは同じく血液循環に言及したハーヴィーの著作『心臓の動きについて』⁷⁸⁾と混同している可能性がある。このロウワーの実験については、フレンドなどピトケアン学派の医者たちも紹介していることから⁷⁹⁾、ブラウンは直接ロウワーの著作を読んだのではなく彼らの著作から採用した可能性がある。以上、ブラウンが各章で重視していた「アニマル・スピリッツ」及び血液循環に関する典拠同定の結果、ブラウンの思想には、ニュートン哲学を重んじたピトケアン学派の思想が反映している可能性が強まったと言えよう。次章ではブラウンの重視した治療原理について、さらに考察してみたい。

5. 『医療音楽』で重視された治療原理

5.1 『医療音楽』における「アニマル・スピリッツ」の重視

本節ではまず、前章の典拠同定の結果分かった、ブラウンの「アニマル・スピリッツ」重視と、

ピトケアン学派の思想との関連性について、歴史的背景を踏まえて検討する⁸⁰⁾。

古代ギリシアから伝わる伝統医学によれば、人体に欠かせない要素は消化の過程で作られ出される四体液、心臓で生成される熱、外部から取り入れられるスピリッツであった。スピリッツという概念が、いつ誰によって導入されたのかに関しては定かではないが、アリストテレス（前4世紀）などの著作には既に頻出し⁸¹⁾、ガレノスが、前述した3種のスピリッツを体系化させた。続く中世においてもガレノスの理論は大きな影響力を誇示した。それは、アラビアを経由してもなお同様のことが言え、イブン・スィーナ（10-11世紀）の『医学典範』においてもガレノスの提唱したもの以上の内容は含まれていない。しかしこの学説を独自の方法で変化させた人物として、マルシリオ・フィチーノ（1433-1499）を挙げる事ができる⁸²⁾。フィチーノは『生命について』⁸³⁾で、スピリッツには人間スピリッツと世界スピリッツという2種あるとする。まず人間スピリッツとは血液の気化したもので、この人間スピリッツの育成や純化が阻まれることにより病気が引き起こされると彼は示唆する。また、フィチーノは人間スピリッツにはガレノスと同じく3種あるとし、その役割や生成場所についてもガレノスに帰す部分が多い。一方で世界スピリッツとは、世界の靈魂と身体とを繋ぐと共に、天界の作用を人間スピリッツに伝える媒体でもあると彼は主張する。つまりフィチーノは世界スピリッツを引き寄せ、吸収することによって人間スピリッツを養い純化できると考えたのである。その方法としては葡萄酒や芳香性の食物、香気と純粋で明澄な空気、そして音楽など、世界スピリッツを多量に含んだものを摂取すれば良いとする⁸⁴⁾。さらにフィチーノは、各惑星に該当する音楽の特徴についても言及し⁸⁵⁾、病気を患った際には、その病気の原因や症状とは反対の性質を有する惑星の音楽を聴くことにより、世界スピリッツが人間ス

スピリッツへと伝達されることで、治療に繋がるという。フィチーノの思想は、その後ハインリヒ・コルネリウス・アグリッパ（1486-1535）やトマス・カンパネッラ（1568-1639）に影響を与えたと考えられるが⁸⁶⁾、古代医学に警鐘を鳴らし、四体液説を非難したパラケルスス（1493か1494-1541）もフィチーノのスピリッツ思想に傾倒していたという事実は、注目に値する⁸⁷⁾。パラケルスス学派は、フィチーノの天体及び人体におけるスピリッツ思想を受け入れ、スピリッツは能動的な作用物であり、それによって自然と人体の中の全ての現象が説明できるとし、スピリッツの生成や蒸留を重視する医学思想を展開した⁸⁸⁾。

しかし、そのスピリッツ思想も近代医学において機械論的身体観が浸透することで「ヴァイタル・スピリッツ」と「ナチュラル・スピリッツ」が覆され、「アニマル・スピリッツ」だけが脳や神経などに関わる生理現象の説明に用いられるといった転換期を迎える。当時、大きな影響力を持っていたデカルトは、いわゆる「アニマル・スピリッツ」を微細で速く動く物質的粒子と認識し⁸⁹⁾、スピリッツが血管や神経などの管を通して体中に流布することによって各部は正常に動くことと捉えるほか、中枢である脳の松果腺に感覚神経が集まり、松果腺の様々な動きでどの神経に「アニマル・スピリッツ」が流れて筋肉を動かすかが決まるとしている⁹⁰⁾。デカルトは、機械論的身体観の中で「アニマル・スピリッツ」の存在を位置づけ、これは18世紀半ばのアルブレヒト・フォン・ハラール（1708-1777）による新しい神経理論の提唱まで西洋全般における機械論者の中で受け継がれていく⁹¹⁾。

その中で、同時代のイギリスでは、少し異なる化学的なスピリッツ思想が受け入れられた⁹²⁾。1650年以降、トマス・ウィリス（1621-1675）、ジョージ・トムソン（1619-1676）などイギリスの医者たちは、スピリッツは物質が内的な原理を有すとし、化学的に論述した⁹³⁾。また、ロバート・ボイル（1627-1691）も世界スピリッツに興

味を持ち、スピリッツは同質ではなく合成された実体であるとして、その化学的組成について探求した⁹⁴⁾。つまり、デカルトの物理的な「アニマル・スピリッツ」観に対して、ウィリスたちは「アニマル・スピリッツ」の起源を化学的な蒸留に求めたのである。このようなイギリスの化学的スピリッツ思想は、前述したパラケルススの思想に基づくと考えられる。これらの背景を受けニュートンは最初、西洋で一般的に論じられていたデカルト流の物理的スピリッツ思想を受け入れていたが、キミアに触れて考えを一転させた⁹⁵⁾。ニュートンは、人体において生命的で空氣的なスピリッツが生み出される化学的プロセスを発見しようと試みた。また、外的なエーテルが体内のスピリッツを通じて作用し、各運動を生み出すと考えた⁹⁶⁾。さらに、ニュートンはスピリッツや重力を論じる際に、非機械論的で超物質的な働きに帰す見方も示している⁹⁷⁾。このようにイギリスでは、パラケルススを経由し、ウィリスに代表されるような化学的スピリッツ思想が受け入れられ、それが18世紀にニュートンを経て、ピトケアン学派における生理学の基盤となった。そのピトケアンは体内の生理学を数学的に立証する「数学的医学」を重んじ、デカルトの生理的概念を拒絶しつつ⁹⁸⁾、分泌物の流動性や心臓運動に、ニュートンの哲学原理を応用した⁹⁹⁾。そして本質的に機械論体系を実証するため、数の大きさを特色とした分泌に関する自論を作り上げたのであった¹⁰⁰⁾。また、消化論を含めた各身体論に関してもニュートン的な自然力学の影響を色濃く受けており、ピトケアンはニュートン哲学を医学上で公式化しようとしたと言える¹⁰¹⁾。ピトケアンは数学的医学を重んじる一方で、ニュートンと同じく神的、宗教的な思想にも目を向け、非機械論的な思想にも傾倒していたほか¹⁰²⁾、スピリッツ思想に関しては前述したボイルにも影響を受けている¹⁰³⁾。それ故、ピトケアンの医学思想には客観性のある数学的、機械論的な生理学的思想と並行して、

主観性を含み化学的かつ非機械論的なスピリッツ思想が共存している。その上でピトケアンは精神疾患などに言及する際、医学上での「アニマル・スピリッツ」の有用性について主張する。

これらのことを受けチェイン、ミード、フレンドなどピトケアン学派の思想でも「アニマル・スピリッツ」は大きな支柱を担っていたが、彼らの中でもスピリッツに関する思想については諸説あった。例えば、チェインはニュートンの哲学思想とフィチーノの思想を組み合わせ、神秘主義的なスピリッツ思想を展開させた¹⁰⁴。彼は、当時イギリスで流行っていた精神疾患に自身も罹ってしまったことから信仰に目覚め、「アニマル・スピリッツ」が神と呼応するものであると捉えて、自論の中で重視するようになった¹⁰⁵。それは『自然宗教の哲学的原理』¹⁰⁶で顕著となるが、ブラウンは明らかにこの著作を読んでいる形跡が見受けられる。というのも、『歌唱・音楽・舞踊機械論』では、チェインの『自然宗教の哲学的原理』に書かれている聴神経に関する記述を約1ページにもわたり、ほぼ正確に引用しているのである¹⁰⁷。しかし『医療音楽』ではその文章が削除されているのみならず、チェインの名前も引用されない。事実、ブラウンは『医療音楽』並びに『歌唱・音楽・舞踊機械論』において、外的なスピリッツには触れていない。その一方で当時、医学思想に神秘主義的、あるいは非機械論的なスピリッツ思想を含まず、1740年代までの著作においては主として現実的立場に立脚した論を展開したミードに関しては¹⁰⁸、『医療音楽』の中で「アニマル・スピリッツ」への言及をも含み2回引用している¹⁰⁹。このようにブラウンは、ピトケアン学派の思想を受け継ぎながらも、特に医学的な「アニマル・スピリッツ」のみを重視するという立場を示している。このような背景を受け、ブラウンが機械論的身体観を論じる中で「アニマル・スピリッツ」を重視する思想に関しては、イギリスで開花した化学的スピリッツ思想を中心に、ピトケアン学

派の影響を色濃く受けており、その中でも体内における「アニマル・スピリッツ」の享受を主としていたことが分かる。

では、この「アニマル・スピリッツ」を重視する治療原理を音楽療法として位置付ける方法は、ブラウン独自のものであったのであろうか。実は、それに関してもブラウンはピトケアン学派の影響を受けていると考えられる。というのも、ピトケアン学派は「アニマル・スピリッツ」と並び、ブラウンが第4章で触れた「非自然的事物」という養生法も重視しているからである。ブラウンは、「非自然的事物」の中の「精神の動揺」として「歌唱」と「音楽」を、そして「運動」として「舞踊」を捉えている¹¹⁰。ブラウンにとって「歌唱」、「音楽」、「舞踊」とは「非自然的事物」という養生法の一つであるが故に、精神疾患の治療手段として用いることが可能となり、そしてそれらは、ブラウンが一貫して重視する「アニマル・スピリッツ」の促進に有効であるため重んじられているのである。つまり、「アニマル・スピリッツ」と「非自然的事物」とは相互性が認められ、なおかつブラウンにおいては、その相互性が医学思想の支柱を担っていると考えられる。したがって次節では「非自然的事物」に焦点をあてて、その様相を概観してみたい。

5.2 『医療音楽』における「非自然的事物」の重視

「非自然的事物」の用語の初出については不詳であるが¹¹¹、実質的な6つの中身は既に古代ギリシアのヒポクラテス（前6世紀）やガレノスの著作に見られる¹¹²。彼らは「非自然的事物」について、病気の原因となるのみならず、身体に必要なものでもあるとした上で、その摂取の仕方については過度なことを避け、中庸を重んじることを勧める。それらの概念はその後アラビアに伝わり、イスハーク・イブン・イムラン（9世紀）やイブン・スィーナを経由して再びヨーロッパへと流布し、イブン・スィーナの著作を

翻訳したコンスタンティヌス・アフリカヌス（11世紀）なども大いにその役割を担った。この頃になると、「非自然的物事」は明らかに養生法の概念に組み込まれていくこととなる¹¹³。というのも、中世における医学体系は、生理学や病理学を含む「理論」と、外科や薬学を主に担う「実践」、そしてそれらのどちらにも属さない「養生法」としての分野があり、「非自然的物事」はその養生法の主たる要素とされたからである。この養生法とは、全く健康でもなく、正しく病気でもないといった、私たちが通常そのような状態にある中間地帯において、予防的、防止的に介入するものである。この分野があったからこそ、「非自然的物事」の概念は生き続け、またそれと並行してその後も、中世においては未だヒポクラテス、ガレノスから流れを汲む伝統医学が医学の主流を占めていたために「非自然的物事」に関する概念も色あせることはなかった。数世紀を隔てて16世紀辺りから、再び「非自然的物事」を含む、ガレノス主義の概念を重んじる風潮が再燃するものの、近代医学が発達するに従ってこれまでの伝統医学に対する懸念が次第に生じ始め、「非自然的物事」も徐々に下火となっていく。しかし、そのような風潮の中でも、17世紀から18世紀にかけ、聖職者バートンや、臨床医学を重んじたシデナム、プールハーヴェのほか、チェイン、ミード、フレンドといったピトケアン学派の医者たちは、「非自然的物事」を重視したのである。

ヒポクラテスの引用が多いことから、彼の思想にも傾倒していたと考えられるピトケアンを始めとして、ピトケアン学派の医者たちは、古代医学思想も重視し、特にその中に含まれる「非自然的物事」を機械論的身体観の中に組み込むことで、その有用性を主張した。前述したチェインも、病気になる前に自身で予防的に介入する「自助」の必要性を主張し、「非自然的物事」の重要性を問いた¹¹⁴。その背景には経済的に豊かになりつつあった一方で、精神疾患が社会的

な問題になっていたイギリスにおいて、禁欲的に過ごすことを提示することで、世俗的な快楽に嫌気を感じていた民衆へ医学的及び道徳的な両観点から警鐘を鳴らす目的もあったと考えられる¹¹⁵。このチェイン及び同じくピトケアン学派のフレンドは、主として「非自然的物事」の中の「食物」「運動」を重視しながら心身の治療にあたる傾向にあった¹¹⁶。他方、ミードは「非自然的物事」の全ての項目を重視した上で『毒物の機械的有効性論』の中で「非自然的物事」の中の「運動」と捉えながら舞踊について言及するほか、「音楽」の聴取と「歌唱」を「精神の動揺」に関連付けて、その治療効果について論を展開する¹¹⁷。これは正にブラウンが『医療音楽』で「歌唱」「音楽」「舞踊」を分けた分類法と酷似している。ただ、ミードはこれらを考察する際に古代のピダロス（前6世紀）やテオフラストス（前4世紀）からの伝承、あるいはイタリアのタランティズムを例として取り上げ、「舞踊」による発汗効果や、「音楽」聴取と「歌唱」によるリラクゼーション効果などに言及するものの、ブラウンのように、これらが「アニマル・スピリッツ」に働きかけるとは論じない¹¹⁸。その一方でピトケアンは、「非自然的物事」という言葉こそ出さないものの、『医学作品』の中で精神疾患について論じる際、「運動」として音楽全般を導入することを提案し、またそれらは「アニマル・スピリッツ」に働きかけると言及している¹¹⁹。このようにブラウンが「非自然的物事」を重視し、その中に「歌唱」「音楽」「舞踊」を含んだことに関しても、「アニマル・スピリッツ」と同様、ピトケアン学派の思想が大きく影響しているということは明らかである。以上のことから「歌唱」「音楽」「舞踊」は、それぞれ「非自然的物事」の中の「精神の動揺」と「運動」に位置付けられ、いずれも、ブラウンが重視した「アニマル・スピリッツ」の促進に効果的であることから、それらを補完治療的に用いることにより精神疾患の治療に繋がると考えて

いた、ブラウンにおける音楽療法思想の治療原理が浮き彫りとなった。

結論

『医療音楽』に見られる「アニマル・スピリッツ」及び「非自然的物事」の重視は、ピトケアン学派の影響が如実に表れていた。ブラウンは、ミードが提案した「歌唱」、「音楽」、「舞踊」をそれぞれ「非自然的物事」の「精神の動揺」や「運動」に組み込むことを踏襲しながらも、ピトケアン自身の思想へと回帰し、これらの作用を「アニマル・スピリッツ」と関連付けることで、ピトケアン学派における音楽療法理論を体系づけたとも考えられる。

医者が言及しながらも体系化しきれなかった音楽療法について、当時、自国イギリスで注目されていたピトケアン学派の思想を用いつつ、「歌唱」、「音楽」、「舞踊」の持つ作用に力点を置き、初めて音楽療法について医療の側から1冊を割いて言及したことは注目に値する。これには当時の社会背景を受け、医者と対立していた薬剤師としてのブラウンが、従来の薬物治療と並行して「歌唱」、「音楽」、「舞踊」を用いることの有用性を医者とは異なる視点から論ずることで、薬剤師の存在価値をアピールし、彼らの地位向上を図る目的で執筆した可能性も否めない。さらに、精神疾患が蔓延していたと言われる当時のイギリスで、従来の治療以上の効果を有する特効薬が市民間で欲されていたのも事実であろう。それを受け、医療に携わっていたブラウンは、当時のイギリスで徐々に市民間にも浸透してきつつあった音楽を用い、補完治療としての音楽療法の有用性を世に伝えようとした様子が『医療音楽』からは読み取れる。

つまり、ブラウンは当時の時代精神を背景に『医療音楽』を出版し、この著作が受け入れられるためには医学思想を十分に把握し、説得性を持たせる必要もあったため、当時活躍していた医者の名前や、機械論的身体観を含む医学理論

を引用することで、「アニマル・スピリッツ」や「非自然的物事」を治療原理として重視する自論の立証を試みたと考えられる。『医療音楽』は理論書であり、実践書ではないものの、現代の音楽療法と同様に、「歌唱」、「音楽」、「舞踊」の持つ生理的、心理的、社会的な効果を応用して、心身の健康の回復、向上を図ることを目的として書かれていた。その点で、『医療音楽』はやはり、音楽療法の思想史を考える上で、現代音楽療法の萌芽とも言うべく、重要な著作であると言える。

謝辞

本論文執筆にあたっては、多くの方々にご協力・ご支援をいただいた。その中でも特に本学のフレデリック・クレインス先生には懇篤なご指導を賜り、心よりお礼申しあげたい。

そして、ブラウンの伝記に関しては本学のジョン・グリーン先生及びラトランド地方史・登記研究会のジル・キンバー氏と、レスターシャー州公文書館のアダム・グッドウィン氏より貴重な情報をご教示いただいた。また、エリザベト音楽大学の片桐功先生にも多くのご教授をいただいた。

さらに、国際日本文化研究センター図書館、エリザベト音楽大学附属図書館、大英図書館の方々には史料の収集において多大なるご協力をいただいた。多くの助力と励ましを与えてくださった皆様方に、この場を借りて深く感謝の意を表したい。

注

- 1) Richard Browne, *Medicina Musica: or, a Mechanical Essay on the Effects of Singing, Musick, and Dancing, on Human Bodies*. London: John Cooke, 1729. 125 p.
- 2) 貫行子『高齢者の音楽療法』音楽之友社、1996. p. 21. 篠田知璋「音楽療法の歴史とわが国における展望」『日本バイオミュージック研究会誌』第3巻、1989. p. 11.

- 3) Juliette Alvin, *Music Therapy*. London : Stainer & Bell, 1998. pp. 46–47.
- 4) Alicia Clair Gibbons and George N. Heller, “Music Therapy in Handel’s England—Browne’s *Medicina Musica* (1729),” in *College Music Symposium*. Vol. 25. 1985. pp. 59–72.
- 5) Penelope Gouk, “Music, Melancholy, and Medical Spirits in Early Modern Thought,” in *Music as Medicine*. Ed. by Peregrine Horden. Aldershot: Ashgate, 2000. pp. 174–179.
- 6) Charles W. Hughes, “Rhythm and Health,” in *Music and Medicine*. Ed. by Dorothy M. Schullian and Max Schoen. New York: H. Schuman, 1948. p. 169.
- 7) 以下の文献などでもブラウンについて、わずかながら触れられている。
 Boxberger Ruth, *A Historical Study of the National Association for Music Therapy*. Ann Arbor: University Microfilms International, 1978. pp. 24–26.
 Laurinda S. Dixon, *Perilous Chastity*. New York: Cornell University Press, 1995. pp. 184, 223, 229–231.
 Alessandro Arcangeli, “Dance and Health: The Renaissance Physicians’view,” in *The Journal of the Society for Dance Research*. Vol. 18. 2000. pp. 3–30.
 George Rousseau, “The Inflected Voice: Attraction and Curative Properties,” in *Musical Healing in Cultural Contexts*. Ed. by Penelope Gouk. Aldershot: Ashgate, 2000. pp. 108–109.
- 8) Anonymus, *A Mechanical Essay on Singing, Musick and Dancing. Containing Their Uses and Abuses; and Demonstrating, by Clear and Evident Reasons, the Alterations They Produce in a Human Body*. London: J. Pemberton, 1727. 46 p.
- 9) William Munk, “Browne, Richard,” in *The Roll of the Royal College of Physicians of London*. Vol. 1. London: Pall Mall East, 1878. p. 390.
- 10) Harold J. Cook, “Browne, Richard,” in *Oxford Dictionary of National Biography*. London: Oxford University Press, 2004. pp. 191–192.
- 11) Richard Hunter, “Reviews,” in *Oxford Journals*. Vol. 22(3). 1967. pp. 170–171.
- 12) Browne, *op.cit.*, pp. ix–xi.
- 13) ムンクとクックは『医療音楽』の初版年を1674年とし、ブラウンの著作として『歌唱・音楽・舞踊機械論』を挙げていないことから、彼らがこの著作の存在を知らず、1729年版『医療音楽』と同内容の初版本が1674年に出版されたと考えている可能性が窺える。しかし『医療音楽』の献呈者であるゲインズボロー伯爵の称号が1682年に初めて作られたことや、ブラウンが『医療音楽』の中で、1703年に出版されたジョン・フレンド『免疫学』第14章「治療」を紹介していることを鑑みると、『医療音楽』が1674年まで遡ることはできないことは明白である。(Ibid., pp. iii–viii., 117./James William Edmund Doyle, *The Official Baronage of England*. Vol 2. London: Longmans Green, 1886. p.1./ John Freind, *Emmenologia* (1703). Ed. and trans. by Thomas Dale. London: T. Cox, 1752. pp. 167–216.)
- 14) 教会の記録簿は消失し原物はないものの、現在データ化されており、図の2行目が問題となっているリチャード・ブラウンの情報である。当時の記録では、BrowneもBrownも区別なく表記されていたため、現在のデータでもその伝統が受け継がれている。
- 15) 湯之上隆編『くすりの小箱—薬と医療の文化史—』南山堂、2011. p. 17.
- 16) P. J. and R. V. Wallis, *Eighteenth Century Medics*. Newcastle: Project for Historical Biobibliography, 1988. p. 476.
- 17) 村岡健次「イギリスにおける薬剤師プロフェッションの成立過程」『甲南大学紀要文学編』第86巻、1992. p. 3.
- 18) 同上、p. 4.
- 19) 同上、p. 4.
- 20) バロック時代の音楽に関しては以下の文献を適宜参照した。
 デイヴィット・G. ヒューズ『ヨーロッパ音楽の歴史』下巻、ベニテズ・ホアキン他訳、朝日出版社、1991. pp. 289–440.

| | | | | | | | | | |
|------|----|-----|---------|---------|-------|-----|-------------------|---------------|--------|
| 4220 | 8 | NOV | 1702 | RICHARD | BROWN | S/O | RICHARD/ELENOR | | OAKHAM |
| 4221 | 5 | JUL | 1710 | RICHARD | BROWN | S/O | RICHARD/JUDITH | | OAKHAM |
| 4222 | 28 | FEB | 1758 | RICHARD | BROWN | S/O | RICHARD/MARY | | OAKHAM |
| 4223 | 5 | AUG | 1759 | RICHARD | BROWN | S/O | RICHARD/MARY | | OAKHAM |
| 4224 | 7 | JAN | 1694/5 | RICHARD | BROWN | S/O | WILL / ANNE | | OAKHAM |
| 4225 | 19 | MAR | 1725/6? | RICHARD | BROWN | S/O | RICHARD/ANNE | ENTRY IN 1726 | OAKHAM |
| 4226 | 19 | MAR | 1726/7 | RICHARD | BROWN | S/O | RICHARD/ANNE | | OAKHAM |
| 4227 | 27 | APR | 1662 | RICHARD | BROWN | S/O | WILLIAM / DEBORAH | | OAKHAM |

- ドナルド・ジェイ・グラウト、クロード・V. パリスカ『新西洋音楽史(中)』戸口幸策他訳、音楽之友社、1998. pp. 17-223.
- 21) Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy*. Oxford: John Lichfield, 1621. 876 p.
- 22) Richard Brocklesby, *Reflections on Ancient and Modern Musick, with the Application to the Cure of Diseases*. London: M. Cooper, 1749. 84 p.
- 23) 命題1: Browne. *op.cit.*, p. 7. 命題2: *Ibid.*, p. 9. 命題3: *Ibid.*, pp. 9-10. 命題4: *Ibid.*, p. 10. 命題5: *Ibid.*, p. 11. 命題6: *Ibid.*, p. 12.
- 24) 例えば以下のような文献の中で「動物精気」と訳されている。
デカルト『情念論』谷川多佳子訳、岩波文庫、2008. pp. 11-17, 34, 87.
- 25) フレデリック・クレインス『江戸時代における機械論的身体観の受容』臨川書店、2006. pp. 4-5.
- 26) C. U. M. Smith, *The Animal Spirit Doctrine and the Origins of Neurophysiology*. Oxford: Oxford University Press, 2012. pp. 34-38.
- 27) クレインス、前掲書、p. 59.
- 28) Browne, *op.cit.*, pp. 7-8, 20.
- 29) *Ibid.*, p. 9.
- 30) *Ibid.*, pp. 9-10, 20-21.
- 31) *Ibid.*, pp. 10-11.
- 32) *Ibid.*, p. 8.
- 33) *Ibid.*, pp. 23-24.
- 34) *Ibid.*, p. 30.
- 35) *Ibid.*, pp. 32-33, 35.
- 36) *Ibid.*, pp. 31-32.
- 37) *Ibid.*, pp. 35-51.
- 38) *Ibid.*, pp. 35-36, 40, 42.
- 39) *Ibid.*, pp. 46-47.
- 40) *Ibid.*, p. 36.
- 41) *Ibid.*, p. 41.
- 42) Evan Ruud, *Meta-Musiktherapie*. Stuttgart: Gustav Fischer Verlag, 1992. p. 22.
- 43) Browne, *op.cit.*, p. 44.
- 44) *Ibid.*, pp. 55-56.
- 45) *Ibid.*, pp. 61-62.
- 46) *Ibid.*, pp. 64-65.
- 47) *Ibid.*, pp. 66-67.
- 48) ヒポクラテスは『流行病』等で中庸を重んじる姿勢を示しており、この思想は古代医学の中で重視された。(Hippocrates, *Epidemics 2,4-6*. Ed. and trans. by Wesley D. Smith. Cambridge: Harvard University Press, 1994. pp. 262-263. [Loeb Classical Library 477])
- 49) Browne, *op.cit.*, pp. 70-71.
- 50) *Ibid.*, pp. 72-74.
- 51) Oswald Doughty, "The Malady of the 18th Century," in *The Review of English Studies*. Vol. 2. 1926. pp. 45-56.
Lawrence Babb, "The Cave of Spleen," in *The Review of English Studies*. Vol. 12. 1936. pp. 165-176.
Helen Deutsch, "Symptomatic Correspondences," in *Cultural Critique*. Vol. 42. 1999. pp. 35-80.
- 52) Browne, *op.cit.*, pp. 80-110.
- 53) *Ibid.*, pp. 110-119.
- 54) *Ibid.*, pp. 120-123.
- 55) Gibbons and Heller, *op.cit.*, pp. 59-72.
- 56) Laurentii Bellini, *Opuscula aliquot* (1695). Lugduni Batavorum: Apud Vil. & Fil. Corn. Boutesteyn, 1714. 291 p.
- 57) Archibaldi Pitcarnii, *Opuscula Medica: quorum multa nunc primum prodeunt*. Roterodami: Fritsh et Böhm, 1714. 283 p.
- 58) ブラウンがピトケアの『作品』からとして引用している、消化と「アニマル・スピリッツ」との関係について、『医学作品』に明記されている。(*Ibid.*, p. 82.)
- 59) ギボンとヘラーによるこのような誤りは、彼らがブラウンの出生及び活躍した時期を17世紀中頃から後半と設定し、『医療音楽』を死後出版として認識していることから、ブラウンと17世紀の著作や人物とをこじつけることにより生じたものと考えられる。
- 60) Browne, *op.cit.*, pp. 10, 82.
- 61) *Ibid.*, p. 20.
- 62) *Ibid.*, p. 114.
- 63) *Ibid.*, p. 117.
- 64) Pitcarnii, *op.cit.*, p. 82.
『医療音楽』82ページではピトケアに添える形でエケーの名前も付してあるが、この記述に関しては代表してピトケアの著作で典拠同定を行った。なお、エケーも消化を含む医学思想の中でスピリッツを重視している。(L.W.B. Brockliss, "The Medico-religious Universe of an Early Eighteenth-Century Parisian Doctor: the Case of Philippe Hecquet," in *The Medical Revolution of the Seventeenth Century*. Ed. by Roger French, Cambridge: Cambridge University Press, 2008. pp. 191-221./Emma Spary, *Eating the Enlightenment: Food and the Sciences in Paris, 1670-1760*. Chicago: University of Chicago Press, 2012. 366 p.)

- 65) Richard Mead, *A Mechanical Account of Poisons in Several Essays*. London: Balph Smith, 1708. pp. 137, 142.
- 66) Freind, *op.cit.*, pp. 196–197.
- 67) Browne, *op.cit.*, p. 20.
- 68) Hermanno Boerhaave, *Aphorismi de cognoscendis et curandis morbis: in usum doctrinæ domesticæ digesti*. Lugduni Batavorum: Apud Johannem vander Linden, 1709. 383 p.
- 69) Hermanno Boerhaave, *Institutiones medicæ in usus annuæ exercitationis domesticos digestæ* (1708). Lugduni Batavorum: Apud Johannem vander Linden, 1713. 509 p.
Hermanno Boerhaave and His Student at the University of Leyden, *Dr. Boerhaave's Academical Lectures on the Theory of Physic: Being a Genuine translation of his institutions*. Vol. 4. London: W. Innys, 1765. (6 Vols.)
- 70) 註釈部分に書かれた思想も含み、以下の箇所などで言及されている。
Hermanno Boerhaave and His Student at the University of Leyden, *op.cit.* (Vol. 4), pp. 246, 277, 333.
なおブラウンは、プールハーヴェが『医学教程』の中で、栄養作用は神経液に頼ると論じていると伝えているが、これに関しても典拠同定の確証を得なかった。
- 71) Smith, *op.cit.*, pp. 147–151.
- 72) 『医療音楽』82ページで名前が付け加えられていたエケーも、アニマル・スピリッツを重視し、ニュートン思想へ転換後、イギリスのニュートン主義的生理学へ影響を与えた。ピトケアンも彼に触れている。(Brockliss, *op.cit.*, pp. 191–221./Pitcairni, *op.cit.*, p. 283.)
- 73) Browne, *op.cit.*, p. 56.
- 74) Laurentii Bellini, *De Febribus* (1683). In florentini in academia pisana anatomes professoris celeberrini opera omnia. Venetiis: Apud Joan and Gabrielem Hertz, 1732. pp. 181–317.
- 75) Pitcairni, *op.cit.*, p. 226.
- 76) Browne, *op.cit.*, p. 91.
- 77) Richard Lower, *Tractatus de corde, item de motu & colore sanguinis, et chyli in eum transit* (1669). Londini: Typis M. C. Impensis and F. Martyn, ad Insigne Campanæ in Coemeterio D. Pauli, 1680. 175 p.
- 78) ハーヴェイの著作の原題は『動物における血液と心臓の動きについて』となっているが、当時から冒頭の部分だけをとって『心臓の動きについて』という略題が定着していた。
Guilielmi Harveii, *De motu cordis et sanguinis in animalibus, anatomica exercitatio*. Lugduni Batavorum: Ex officina Ioannis Maire, 1639. 351 p.
- 79) Friend, *op.cit.*, pp. 137, 193.
ピトケアンもロウワーの血液循環について言及している。(Pitcairni, *op.cit.*, p. 45.)
- 80) スピリッツ思想の歴史的背景に関しては以下の文献を適宜参照した。
二宮陸雄『ガレノス 霊魂の解剖学』平河出版社、1993. pp. 339–451.
G. Verbeke, *L'évolution de la doctrine du pneuma du stoicisme à S. Augustin*. New York: Garland Publishing, 1987. pp. 62–90, 206–219.
- 81) 『霊魂論』第2巻第8章(420b 20) や、第2巻第9章(421b 15) などに出てくる。
- 82) フィチーノとスピリッツとの関連に関しては以下の文献を適宜参照した。
D. P. ウォーカー『ルネサンスの魔術思想』田口清一訳、筑摩書房、2004. pp. 12–72.
- 83) Marsilio Ficino, *De vita libritres*. In Opera omnia, Vol. 1. (Basel, 1576) Facsimile. Ed. by Paul Oskar Kristeller and Mario Sancipiano. Torino: Bottega d'Erasmus, 1983. 1012 p.
- 84) *Ibid.*, p. 523.
- 85) *Ibid.*, p. 593.
- 86) ウォーカー、前掲書、pp. 109–116, 236–273.
- 87) 同上、pp. 104, 116–127.
- 88) Paracelsus, *De Natura Rerum* (1537). In Sämtliche Werke, Part. 1, Vol. 11. Ed. by Karl Sudhoff. Munich: R. Oldenbourg, 1928. pp. 329–330.
- 89) デカルト「人間論」『デカルト著作集4』伊東俊太郎他訳、白水社、1973. p. 232.
- 90) Smith, *op.cit.*, pp. 102–107.
デカルト、前掲書、pp. 30–42, 51. (『情念論』)
- 91) Albrecht von Haller. *First lines of Physiology* (1747). Ed. by William Cullen and H. A. Wrisberg. Vol. 1. Edinburgh: Robinson, 1767/1786. (Reprint with new Intro.: King L. New York: Johnson Reprint Corp, 1966.) pp. 236–238.
Smith, *op.cit.*, pp. 191–192.
- 92) Antonio Clericuzio, “The Internal Laboratory. The Chemical Reinterpretation of Medical Spirits in England,” in *Alchemy and Chemistry in the 16th and 17th Centuries*. Ed. by Piyo Rattansi and Antonio Clericuzio, Dordrecht: Kluwer Academic

- Publishers, 1994. p. 51.
- 93) *Ibid.*, pp. 61–63, 65–69.
- 94) Robert Boyle, *The sceptical chymist: or chymico-physical doubts & paradoxes, touching the experiments whereby vulgar spagirists are wont to endeavour to evince their salt, sulphur and mercury, to be the true principles of things. To which in this edition are subjoyn'd divers experiments and notes about producibleness of chymical principles*. Oxford: Henry Hall for Ric. Davis, and B. Took. 1680. 766 p.
Robert Boyle, *Memoirs for the natural history of humane blood, especially the spirit of that liquor*. London: Printed for Samuel Smith, 1683. 289 p.
- 95) Clericuzio, *op.cit.*, p. 69.
- 96) Isaac Newton, *The Correspondence of Isaac Newton*. Vol. 1. Ed. by H. W. Turnbull. Cambridge: Royal Society, at the University Press, 1959. pp. 365–369.
また、ニュートンのエーテル及びスピリッツ思想については以下の文献に詳しい。
松山壽一『ニュートンとカント』晃洋書房、1997. pp. 61–123.
- 97) ベントリー宛ての書簡でも、宇宙体系について執筆した『プリンキピア』について、読み手を神への信仰に導くことも目的の一つであると述べ、ニュートンの主観的意図においては、宇宙の探求と神への信仰とは緊密に結びついていると考えられる。(吉仲正和『ニュートン力学の誕生』サイエンス社、1982. pp. 178–183.)
- 98) Anita Guerrini, “Archibald Pitcairne and Newtonian Medicine,” in *History of Medicine* 31. 1987. pp. 76, 78–79.
- 99) Archibald Pitcairne. *Solutio problematis de historicis* (1688). Trans. by George Sewell, London: E. Curl, 1715. pp. 43–44, 51–52.
- 100) Guerrini, *op.cit.*, pp. 77, 81. (“Archibald Pitcairne and Newtonian Medicine”)
- 101) *Ibid.*, p. 79.
- 102) Pitcairne, *op.cit.*, pp. 166–167.
- 103) Guerrini, *op.cit.*, p. 80. (“Archibald Pitcairne and Newtonian Medicine”)
- 104) Gouk, *op.cit.*, pp. 188–190.
- 105) Anita Guerrini, “Isaac Newton, George Cheyne and the ‘Principia Medicinæ,’” in *The Medical Revolution of the Seventeenth Century*. Ed. by Roger French and Andrew Wear, Cambridge: Cambridge university press, 2008. pp. 243–245.
- 106) George Cheyne, *Philosophical Principles of Natural Religion*. London: George Strahan, 1705. 522 p.
- 107) Anonymus, *op.cit.*, pp. 21–22. (*A Mechanical Essay on Singing, Musick and Dancing*)
- 108) Guerrini, *op.cit.*, p. 245. (“Isaac Newton, George Cheyne and the ‘Principia medicinae’”)
- 109) Browne, *op.cit.*, pp. 50, 114.
- 110) *Ibid.*, pp. 120–123.
- 111) 「非自然的事物」については以下の文献を適宜参照した。
L. J. Rather, “The ‘Six Things Non-Natural,’” in *Clio Medica* 3. 1968. pp. 337–347.
Saul Jarcho, “Galen’s Six Non-Naturals: A Bibliographic Note and Translation,” in *Bulletin of the History of Medicine* 44. 1970. pp. 372–377.
Luís García-Ballester, *Galen and Galenism*. Ed. by Jon Arrizabalaga, Montserrat Cabré, Lluís Cifuentes, Fernando Salmón. Aldershot: Ashgate, 2002. pp. 105–115.
- 112) Hippocrates, *op.cit.*, pp. 286–287.
Claudius Galenus, *Arsmedica*. In *Opera omnia* (1821), Vol. 1. Ed. and trans. by C. G. Kühn. Hildesheim: Georg Olms, 1997. pp. 367–368.
- 113) 養生法に関しては以下の文献を適宜参照した。
ハインリッヒ・シッパーゲス『中世の患者』濱中淑彦他訳、人文書院、1993. pp. 26–49.
児玉善仁『イタリアの中世大学』名古屋大学出版、2007. pp. 259–283.
- 114) Guerrini, *op.cit.*, pp. 240–241. (“Isaac Newton, George Cheyne and the ‘Principia Medicinæ’”)
Gouk, *op.cit.*, p. 188.
- 115) Guerrini, *op.cit.*, pp. 241, 244–245. (“Isaac Newton, George Cheyne and the ‘Principia Medicinæ’”)
- 116) George Cheyne, *An essay of health and long life* (1724). London: J. Leak, 1734. 232 p.
Freind, *op.cit.*, 216 p.
また、チェインがこれらを重視したことに関しては以下の文献も参照した。
John Wesley to Susanna Wesley, 1 nobemner 1724. In *The Letters of John Wesley*, Vol. 1. Ed. by John Telford. London: Epworth Press, 1931. p. ii.
- 117) Mead, *op.cit.*, pp. 73–76.
- 118) *Ibid.*, pp. 73–78.
- 119) Pitcairni, *op.cit.*, p. 111.

Richard Browne's Music Therapy Theory as Seen in *Medicina Musica*

MITSUHIRA Yuuki

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies,
Department of Japanese Studies

Since primeval times, people have used music as a component of physical and mental therapy and as a means of promoting and maintaining good health. To fully understand music therapy in its contemporary form, it is crucial to reveal the rich heritage of music therapy in the course of history. This study analyzes *Medicina Musica* (1729) by Richard Browne. Browne was an apothecary who worked on music therapy, a subject historically taken up primarily by philosophers and clergymen. His contribution in *Medicina Musica* made him the first to offer insight into music therapy from a medical perspective. Browne's description of the therapeutic effects of music is believed to be a pioneering work in the history of music therapy.

In previous studies that treat this book, neither books nor scholarly articles focusing on *Medicina Musica* in its entirety have been found. This article investigates Browne's music therapy by analyzing *Medicina Musica* itself. Making reference also to a work that Browne wrote anonymously two years before the publication of *Medicina Musica* called *A Mechanical Essay on Singing, Musick and Dancing* (1727), this article includes (1) a bibliographical review, (2) an account of Browne's life and times, (3) a description of the content of *Medicina Musica*, (4) a description of the mechanistic view observed in *Medicina Musica*, and (5) a summary of the therapeutic principles found in *Medicina Musica*. Finally, I have tried to position *Medicina Musica* in the history of music therapy.

Browne's approach to music therapy was significantly influenced by Pitcairn and his students. Furthermore, Browne emphasized two concepts which constitute his therapeutic principles: "animal spirits" and "non-natural things." Even though *Medicina Musica* is not a practical book but a theoretical one, like modern music therapy it highlights the theme that singing, music, and dancing can aid in the recovery of physical and mental health.

Key words: Richard Browne, *Medicina Musica*, *A Mechanical Essay on Singing, Musick and Dancing*, animal spirits, non-natural things, music therapy